

ルカによる福音書24章36-49節 「復活信仰の誕生」

1A 血肉を持つ復活 36-43

1B 恐れ怯える弟子たち 36-37

2B 魚を食べるイエス 38-43

2A 父なる神の約束 44-49

1B すべての成就 44

2B 罪の赦しを得させる悔い改め 45-49

本文

今朝、注目したい聖書箇所は先ほど交読文で読みました、ルカによる福音書 24 章 36-49 節です。十字架に付けられて死んだイエスが、三日目に墓の中から生き返り、弟子たちの間に現れたところであります。イエスが、死者の中から甦った…この一つの歴史の中で起こった出来事が、キリスト教の始まりです。私たちの信仰が、イエスが甦ったということに全て、よりかかっているといっても過言ではありません。歴史を変え、全世界を変えてしまいました。そして、教会の礼拝に集っている多くの者たちは、生きたイエスに出会ったという体験を経ています。これが、私たちの信仰表明です。

先週の火曜日でしょうか、興味深い会話がありました。教会からの帰り、夜遅く、夜桜もきれいな通りの一角で、若い男性に声を掛けられました。宗教関係の人です。おそらく仏教系の新興宗教だと思うのですが、話を聞いていると、彼は興奮しながら、自分たちの祈りの凄さを話します。人が死んでも、かなり長いことその死体が黒ずむことがないそうです。まあ、こういう話は普通の大勢の人は無視して、聞き流してしまうのですが、私はその宣伝とお誘いを、こういつて断ってしまいました。「私たちクリスチャンは、死体が黒ずまないとかよりも、もっと凄いことを信じています。死体が生き返ること、復活を信じているんです。次の日曜日、その初めの人イエス・キリストが死んだのに、生き返ったことを記念する日なんです。」彼はきょんとしてました。おそらく、私たちの信仰は、その祈っても黒ずまないということを聞くよりも、もっともつと何を言っているのか！と不可解にさせるようなことを、話しているのだと思います。

イエスに三年以上もいっしょにお供していた弟子たちも、全く信じられないでいました。イエス様が、ご自分が十字架で殺されても、甦ることについて、まだ死なれる前から弟子たちに、何度も、はっきりと話していました。「人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえなければならぬ(ルカ 9:22)」と語られています。けれども、弟子たちは、それが信じられないというよりも、頭の中に入っていないませんでした。私たちは、あまりにも自分たちの想定を超えてしまっていることは、まずもって頭の中を通過しています。音とし

では聞こえているでしょう、日本語としても理解しているでしょう、けれども、それが事実として理解する、いや概念として理解することもできていないことでしょう。けれども、イエス様はそのまま、これからこのことが事実として起こることを語っていたのです。

そして、イエス様は十字架に付けられます。弟子たちは、イエス様が捕えられる前に逃げてしまいました。唯一、途中までついていったペテロも、イエス様がユダヤ人の裁判で裁かれている時に、近くにいる人に、「あなたも、あの人の仲間でしょう。」と言われただけで、「あんな人は知らない」と三度も呪ってしまいました。そして、十字架という惨い極刑を受けて、死なれ、その日のうちに墓に葬られたのです。それがおそらく金曜日だと思われます。

その三日目、明け方早く、女たちがまず墓に行きました。ユダヤ人の埋葬は、その遺体を岩の穴の中に入れて、それを長い期間かけて腐敗させて、残ったお骨を箱の中に入れると言うことをしていましたが、三日経っているのに、その腐敗臭を消すために香料を携えて墓にやって来ました。ところが、遺体がありませんでした。そこに、天使がいたのです。そして、イエスが、甦られたと言いました。それで、弟子たちに女たちは全て報告したのです。けれども、「この話はたわごとのように思えたので、使徒たちは彼女たちを信じなかった。(24:11)」とあります。

そして二人の弟子が、エルサレムから離れて、エマオという村に向って行っていました。なんとそこに、生き返ったイエス様が共に歩かれました。彼らはイエス様だと気づきませんでした。そして、自分たちの主イエスが十字架に付けられてしまって、死んでしまった。女たちは生きているのだといって、確かに墓に行ったら空っぽだった、と話して、イエス様は、「心が鈍い人たち」と言われて、聖書から、ご自分について書いてあることを説き明かされました。それで弟子たちと同じ宿に泊まられ、パンを裂いて渡された時に、彼らはこの方がイエスだと分かりましたが、その場で姿が見えなくなったのです。それで、そこからすぐにエルサレムに引き返してきて、興奮しながら、自分たちがイエスを見たと言ったのです。そしてペテロも、イエスを見たと言いました。その時にです、イエス様が彼らの真ん中に現れたのは。

1A 血肉を持つ復活 36-43

1B 恐れ怯える弟子たち 36-37

36 これらのことを話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。37 彼らはおびえて震え上がり、幽霊を見ているのだと思った。

イエス様が、真ん中に現れました。もうこれで、彼らはイエス様が生き返ったという事実を受け入れると思いきや、そうではなく、脅えて震え上がり、幽霊を見ていると思いました。なぜ、そうなってしまったのか？そうです、弟子たちには恐れがありました。いろいろな恐れや不安があったことでしょう。

一つは、他のユダヤ人を恐れる恐れです。自分たちは、この方こそイスラエルを解放される方だと望みをかけて、すべてを捨ててお供していました。ところが、解放どころかユダヤ人の祭司長や議員たちは、イエスを死刑にするためにローマ当局に引き渡してしまったのです。自分の全てをかけて付いてきた方が、死んでしまったのです。こんなに恥ずかしいことはありません、そして偽の救世主についていったカルトの信者であるかのように見られ、また物理的な危害、あるいは逮捕されるかもしれません。それで恐れていたのです。しかし、私たちも人生の中でそういった恐れはないでしょうか？自分がこれだと思って、命かけてやって来たことが、全くの的外れであったかのように軌道を外してしまいました。自分が「これだ」と思って、自負をもってやって来たことが、脆くも崩れ去ってしまったのです。面目を大きく失っていますから、絶えずそこに触れられると過敏に反応し、恐れ、脅えている自分がいます。

もう一つは、イエスご自身を見捨ててしまった引け目です。イエス様は、最後の晩の食事で、「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ります。」と言われた時に、弟子たちはたいへん悲しんで、一人ひとりイエスに、「主よ、まさか私ではないでしょう。」と言いだした、とあります(マタイ 26:22)。そして、互いに対しても「お前ではないか。」と言ひ合いにもなりました。自分たちの中に、自分はイエスを裏切ってしまうのではないかと引け目があったのです。どんなにイエス様を愛していても、その愛している方を裏切ってしまう自分の悪があると気づいていたのです。そして事実、イエス様が捕えられた時に、さっさと逃げてしまったのです。それで、イエス様が現れた時に、彼らは脅えたのです。まるで自分を呪い襲って来る幽霊であるかのように。かつて、サウルという王が主に背いて魔女に伺いを立てましたが、そうしたらなんと、自分の恩師であった、もう既に死んだ預言者サムエルが出てきました。そのサムエルはサウルに死ぬことを宣言し、それで死んだように彼は堅くなってしまいました。まさに、そのように亡霊が出てきたのではないかと恐れたのです。このような不安も、私たちは多かれ少なかれ持っていないでしょうか？自分が抱えている引け目から、実体はないのにあるかのようにおびえてしまうことです。

そのことを全てイエス様はご存知です、なので、イエス様が現れた時の第一声は、「平安があなたがたにあるように」だったのです。イエス様は、彼らの希望が失望に終わっていないことを示し、平安を与えようとされていました。そして、彼らをご自分を見捨てて逃げたことについて、もう赦しておられること、愛してやまないことを知らせて、それで平安が与えられるように願っておられました。今、皆さんにもイエス様は平安を与えたいと願っておられます。自分が行なってきたこと、そこにある引け目、やましさを、また自分がやってきたことが裏切られた、失望に終わってしまっていること、これらを取り除き、平安と希望で満たしたいと願われています。

2B 魚を食べるイエス 38-43

38 そこで、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを抱くのですか。39 わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。幽霊

なら肉や骨はありません。見て分かるように、わたしにはあります。」⁴⁰ こう言って、イエスは彼らに手と足を見せられた。

そうです、イエス様はご自分が亡霊ではないことを、手と足を見せて確かめさせました。イエス様の復活された体は、戸が閉められていてもその中に入ることのできるのですが、けれども同時に、血肉を持っていたのです。しかも、そこには十字架に付けられた時の釘の跡が手足にありました。警察や裁判において、事実確認作業がありますね。本当に事実と認定するために、実際にそうであるかを目視して、必要ならば手で触れて、事実であることを確認します。イエス様は、今、それを行われています。そのようにして、まだ受け入れられていない事実を受け入れさせ、平安を与えようとしています。今、見てはいないけれども、イエスが生きていると信じている者たちから、どのよにしてイエス様が生きておられることを確かめることができるのか？それは、その人が確かに主の言われているように動いて、行動して、確かめるようにしてその信仰を示すことによって、相手は確かにイエスというものは生きていると確認できるでしょう。復活信仰というのは、概念ではないのです、復活を信じているそれぞれの生活から具体的に現れ出て来るものです。

そして弟子たちにとっては、手足の釘の跡を見ながら、なおのこと生きているイエス様を見て、深い慰めを受けたに違いありません。その釘の後は、惨い極刑の跡です。重罪に対する処罰です。けれども、イエス様は全く罪を犯されませんでした。しかし、その釘の跡には罪犯した者たちのために、身代わりになって死なれた後だったのです。すなわち、釘の跡は、「わたしは、罪の後処理を全て終わったのだよ。もう、あなたの罪は過ぎ去ったのだよ。」と太鼓判を押してくれているのです。なんと大きな慰めでしょうか、イエス様は罪を赦され、赦しただけでなく、全く罪を犯していなかったかのように、自分に接してくださるのです。

41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっていたので、イエスは、「ここに何か食べ物がありますか」と言われた。⁴² そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、⁴³ イエスはそれを取って、彼らの前で召し上がった。

見てください、弟子たちは恐れ、脅えていたところから、「喜び」に変わりました。今、話した、自分たちの希望が失望に終わっていなかったということ、イエス様が自分たちの負い目を全て取り除いてくださったことを、瞬時に見せてくださったからです。けれども、今度は別の疑いが出てきました。「あまりにも、美味すぎる」ということです。あまりにもすばらしい事実なので、信じられないということです。けれども、このことをも克服しないといけません。あまりにも素晴らしい話を、あまりにもすばらしい話のまま、受け入れないといけないのです。神の愛、神にある希望、これは、私たち人間の世界には全くないものであり、それゆえ、恐れ多くて受け入れ難いと思ってしまいます。けれども、受け入れてください！ そうすれば、心の中で大きな変化が起こるでしょう。自分には全くなかった、自分には全くできなかつたこと、心の一新が起こり、そして自分が変えられた人、生まれ変

わる人になります。

イエス様はそして、焼いた魚を彼らの前で食べられます。興味深いことに、イエス様が甦られてから食事を一緒にされたのは、これだけではありませんでした。先ほどの二人の弟子とも、パンを食べておられましたし、また後に、ガリラヤ湖畔で朝食に魚とパンを用意されていました。食事をしている時に、いかがでしょう、何か深刻なことを話せるでしょうか？ 喧嘩ができるでしょうか？ いいえ、文字通りお腹に食べ物が入らなくなります。食べているということは、そのまま腹を割る、平和な状態を表しています。そして、互いに心を分かち合う時です。ですから、主が甦られたのは、私たちと平和また交わりを持つためです。

2A 父なる神の約束 44-49

このようにして、主はご自身が生きておられることを、確かなものとされました。けれども、それだけではありません、キリスト者の復活信仰は、体験だけではないのです。弟子たちも、ただ肉体をもって現れたイエス様だけにその信仰を持って行ったわけではありません。聖書の言葉に、確かに復活が預言されていたこと、聖書の約束が確かに、イエス様にあって実現したということによって、信仰が建て上げられています。

1B すべての成就 44

44 そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」

世界には、大きな宗教が他にもいくつかあります。その代表的なものは、仏教とイスラム教です。けれども、キリスト教はこれら二つの宗教と根本的に違う点があります。その一つが、「前もって預言されていた」ということです。宗教を始めた人を教祖と言いますね、仏教であれば仏陀、イスラム教であればモハメットです。確かに、彼らの言行によって大きな宗教が始まりました。では、イエス・キリストはどうなのか？ イエスがキリスト教を始めた、開祖したと思われがちですが、いいえ、始めたのではなく、実現した、成就したといったほうがよいのです。前もって預め、キリスト、救い主が来るということを、紀元前 1000 年、2000 年辺りから、少しずつ預言者によって語られてきました。それが旧約聖書です。少しずつ語られてきて、このような人物が来るというものが、はっきりと分かって来て、そして今から二千年前ほど前に、このような人物というのが、イエスの生涯によってことごとく実現していったのです。仏陀も、モハメットも、どちらも自分が開眼した、あるいは啓示を受けたと言いましたが、他に誰もそれを証言することのできる人はいませんでした。自分でそう言ったと主張するだけでした。しかし、イエスは、モーセの律法や預言書、そして詩篇などによって、確かにこの方が救い主、キリストであるとの膨大な数の証言があるのです。

ユダヤ人は、聖書を信じていました。けれども、問題がありました、すべてを信じ切れていなかったことです。先ほど話した二人の弟子、エマオの村に行こうとしていた時の弟子たちに、イエス様は話しておられました。「25 ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。26 キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったではありませんか。」キリスト、救い主が栄光の姿で来られることについては信じていました。ですから、キリストが来られたらその時の異教徒の支配であるローマを、力をもって倒してくださると信じていたのです。ところが、キリストは苦しみ、それから栄光の中に入るということも書いてあるのです。栄光と力を持ってこられるということは文字通り信じていたのに、苦しむことについてはあまり注目しなかったか、また比喩的に解釈していました。そのために、イエスが十字架に付けられるということが、預言の成就とはとらえることができなかつたのです。しかし、キリストの十字架は、預言が外れたのではなく、むしろ預言の成就であり、神のご計画が実行されたことでした。

私たちは、どうしても心の中で、自分には都合の悪いもの、取り組みたくないもの、理解できないもの、避けて行ってしまいます。あるいは人生の中でも避けてしまっているかもしれませんね。けれども、避ければ避けるほど、実は自分をがんじがらめにしてしまっています。自分には不都合だと思われていることが、実は自分に自由を与える最善の道、近道であるのに避けます。その際たるものが、神ご自身です。神のなされていることを、避けようとするのです。神の語られている言葉を避けていることです。

2B 赦しによる解放 45-49

45 それからイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、46a こう言われた。

そう、私たちには、自分で悟ることさえできないのです。自分の心があまりにも鈍くなっており、強情になっていたために、聞くものも聞けないようになってしまいました。しかし希望があります。神ご自身が悟らせるために心を開いてくださいます。神を知るための力を、神ご自身が与えてくださるのです。私たちが、自分ではとてもとても、神の世界は理解できないと思っておられたかもしれません。しかし、自分が神に求めれば、神がその力を与えてくださいます。必ず、与えてくださいます。求める者に、イエス様は与えると言われました。問題があります。それは、「自分は知っている」「分かることができる」と思っていることです。自分があまりにも、神の真理を拒んでいたのです。自分自身では悟ることさえもできないのだと、認めることをしなければ、神であっても、その自由意志に反してまで、分からせることはできません。

46b「次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』エルサレムから開始して、48 あなたがたは、これらのことの証人となります。

イエス様が、なぜ苦しみを受けられたのでしょうか？そして三日目に甦られたのでしょうか？ここに言われているように、「罪の赦しを得させる」ということです。赦すということは、人を解放させます。聖書には、罪を借金のように例えられています。負い目があって、それを誰かに負っている時に、それは自分がその人に借金をしているようにみなされます。それゆえに、その人に対して自分は囚われの身となってしまいます。私たちは、過去のことを忘れず、人が変えられることよりも、その人をがんじがらめにするという罪を持っています。赦さないという罪が、最も大きな罪と言ってもよいでしょうか。人をがんじがらめにして、恐れをもたらし、自分自身も不安と恐れの中で生きています。イエス様は、罪の赦しのためにこの地上に來られました。人々を、負い目の帳消し、罪の縄目から解き放つために來られました。十字架に付けられている時も、こう祈られたのです。「23:34 父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」

罪赦されることが、いかに私たちに安心させ、解放させることでしょうか？赦さない状態は、いつまでも掃除をしない側溝のようなもの、そこにはあらゆる汚れや臭さ、そして漏れ出して他にも悪影響を及ぼします。しかし、赦すということは新しくされること。また新たな出発をする機会を与えること。そして命が流れ、また清さが流れます。神がまず、キリストにあつて私たちに罪の赦しを備えてくださったのです。

そしてそこに必要なのは、「悔い改め」です。悔い改めとは、元々の意味は「思い直す」ということです。これまで自分のほうばかり向いていたその生き方を思い直し、神のほうに向かうことです。悔い改めについて、いつも大きな誤解があります。それは、自分の行いを改めることによって、神に受け入れてもらうことです。むしろ、自分には全くできない、変えることはできない、何もできないということ、そのまま神に申し上げ、神の憐れみにすがることです。ここには、へりくだりが必要です。自分には何もできないことを認めることは、とても痛いことです。辛いことです。でも、ちょうど子供が親に頼るように、そこには本来の自分がいます。聖書で、「全能の神」と訳されているエル・シェダイという神の名前は、母親の乳房を表しています。赤ん坊が母親の乳房に抛り頼むように、自分が神の前に出て、神の前に泣く時、その時に神が豊かな、豊かな罪の赦しを与えてくださいます。すべてのたまりにたまつた罪を全て洗い清め、まるで何事もなかったかのように、ありのままのあなたを受け入れてくださいます。

49 見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

この力とは、聖霊のことです。聖霊の力を受けることによって、弟子たちが、罪の赦しのための悔い改めを宣べ伝えることができるようになります。もしかしたら、今、聖霊がみなさんの心に語りかけておられるかもしれません。自分があまりにも重荷を負い過ぎた。自分で頑張っていた。これこそが、神の前では罪なのだ。どうかその罪を悔い改め、神のほうに走って来てください。